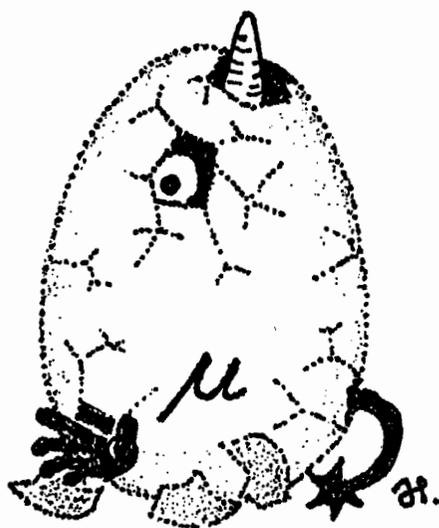


# 日本生物學會誌

第 19 号



日本生物學會

1984年 12月15日

第 19 号

< も く じ >

奥野良之助：「草文明批判」……？ ……	649
加藤喜代志：映画「水俣病——その20年——」の感想文 を読む——センチメンタリズムからヒューマニズムへ——	654
書評（チビ）：「睡眠革命——われわれは 眠りすぎているか」メイ・レティス著 ……	671
新聞記事から（野良）：“割りばし論争” そのあと ……	673
編集者への手紙 ……	677
編集局だより ……	680
広告：薬の安全性を私達の手で！ 大ホウ薬品労組の闘いを支援しよう ……	683

「車文明批判」……………?

奥野良之助

本誌第16号(昨年12月)に、「下菊マダム」なるいやらしいペンネームを使って、「車を捨てた人たち」(田中公雄著)という真面目な本を不真面目に書評した男がいた。“マダム”が“男”というのはおかしいが、この男は何をかくそう、編集局だよりにしばしば登場する当学会の現編集局長補佐その人なのである。彼の意図は、昨年車の免許をとって走りまわっている当学会の会長、つまり私をからかうという、不純極まりないものであった。

もっとも、これくらいのあてつけに恐れ入っているようでは、当学会の会長などつとまるわけはない。私はかつて、「交通評論家」なる肩書で、新聞の「車文明批判特集」見開き2ページに主演したことさえあるほど、交通問題の専門家なのである。それはいまから10年以上も前、1971年の秋のことであった。神戸の水族館で、今よりはまだ有意義な仕事をしていた私のところへ、顔見知りの神戸新聞の記者がやってきた。

「来年の正月特集で“車文明批判”というの、やりますねん。ちょっと、願、貸してくれまへんか。」

「中身によっては貸してもええけど、ほんまにちゃんと批判するんかいな。」

「そのつもりで方々当ってみましたんやけど、まともな人は全然話が面白いんですわ。それでオクノさんとこへ来ましたのや。」

“面白い話”と“オクノさん”がなぜ結びついて、“まともな人”となぜ結びつかないのか私にはよくわからなかったが、話を聞いてみると、若い美人のマンガ家と私とを車に載せて兵庫県中走りまわり、車の悪が見えたところで私に何か言わせ、それをマンガにしようという企画らしい。

私は昔から、新聞なるものをほとんど信用していなかった。だから、新聞への出演はすべて断わってきた。と言えばカッコいいが、神戸在住15年の間に来た出演依頼は2件である。なぜ私が新聞不信におちいったか? それはさらに10数年前にさかのぼる。当時読売新聞が「鳴門海峡学術調査」なるものを、そうそうたる大学者、大先生を集めて挙行した。我が恩師宮地伝三

郎京大教授をはじめ、末広恭雄、日高孝次両東大教授などがそのメンバーであり、学生だった私も潜水調査班の1人として参加した。そこで、天下の大読売新聞の紙面のつくり方をじっくりと拝見したのが、新聞不信の原因である。巨人きらいはその時ではない。もっと昔である。ついでに、これらのそうそうたる大学者の調査ぶりも観察させていただいた。おかげで学者不信にもおち入り、自分が大学の先生になった今でも、そこからぬけきれない。

ところで、そのころ私は、金沢大学へ移ることが決まっていた。すぐ来てほしいということだったが、そう言われてすぐとんでいくのは初心者のすることである。私のように、市の役人を15年もつとめたベテランともなると、そんな軽卒なこととはしない。なにぶん長い間勤務した水族館であり、仕事のあと始末やひきつぎやらがたくさんある、てなことって、2か月後の翌年1月1日付の採用にしてもらった。憶えやすいし、エンギがいいし、その上正月休みがあるからすぐ赴任しなくてもよい。水族館の最後の5年間は、干されて仕事はなかった。だから仕事のひきつぎなど、したくともなかったのだが。水族館はやめることになったし、大学へはまだ行かなくていいし、身心ともに浮き浮きとすごしていたときで、その心のすきにつけこまれて、とうとう出演を承知してしまったというわけである。

ところが困ったことが起きた。正月特集は1月1日付で、その時すでに私は水族館職員ではない。とって、神戸新聞に金沢大学教官が出てくるのもおかしい。困った記者が考え出したのが、“交通評論家”なる肩書であったというわけである。

さて我々は、2台の“車”に分乗し、“車文明批判”の取材に出発した。2日目の夕刻、六甲山トンネルをぬけたとき、車の行きかう神戸市の夜景を見下して、車批判の新聞記者たちの目は、生き生きと輝いたのであった。

さて、“交通評論家”として私は、いかなる論説を語ったのか。あちこちであらぬ感想を口走ったが、たいい忘れてしまった。いま覚えているのは次の2つである。

<その1> 車は停めておくにかぎる。

神戸のフェリー・ボートの港へいったときのことである。たくさんの車がつぎつぎと船の中にのみこまれ、動かぬようにしぼり上げられていた。とたんに、騒音を発生し、廃棄ガスを出し、人をひき殺す車が、何にもせず、おとなしくなってしまうのである。「そうだ。車は動けなくしてしまうにかぎる！」

まず、日本全国津々浦々にいたるまで、フェリー・ポート網をはりめぐらす。そして車は、最寄りの港から目的地の近くの港まで、乗船しなければならぬことにする。山の中はどうするか。日本には世界に誇る国鉄網がある。車を載せる台車をつくって走らせるのである。国鉄の赤字もたちまち解消するだろう。この間新聞に、津軽海峡トンネルの中をカー・トレインを走らせようという計画があるという記事が出ていた。10数年前に冗談で考えたことを、まじめに提案して

いる人がいるらしい。

「これで車の悪は大幅に減るにちがいない」と言ったら、「町の中の車は、それでも減りません」と、記者が反論してきた。「それにはちゃんと別の対策が用意してあるんや。」本当はそんな用意はなかったのだが、その場でつくり上げたのが次の案である。

<その 2> パラバラ自動車をつくろう。

私の娘は小さいころ大突活発で、何かという私に体当たりしてきた。小さいうちはよかったが、小学校へいくようになってからも止めないので、私はしばしば生命の危険を感じるようになった。彼女は自己の体力の増大の自覚がなかったのである。私は、「なんじの力に目覚むべし」と説教につとめたことがある。

人は車に乗ると、軽くアクセルをふむだけで何十馬力という力を出すことができる。しかるにドライバーの多くは、自己の強力さに気がつかない。これが交通事故の最大の原因である。しかし、大人は少々説教したくらいということ聞かない。

あるとき、私の息子がプラモデルのクラッシュカーをもってきて、ゼンマイを巻いて走らせた。その車、壁にぶつかると、ひっかけがはずれて、バンパーやフエンダーはおろか、屋根まで四散して、ドライバーが車台の上で裸になってしまうのである。息子はまたくみ立てて、パラバラにしては喜んでた。

「車をみんな、そういうしかけにするというのはどうや。人間にぶつかっても、車の方がパラバラになって、けがせんやろ。」

説教ではきかなくても、こんな車に乗ってればいやでも慎重に運転するようになるはずである。横断歩道で停っている車など、ちょいとけとばしてやればよいのである。

「そんなことしたら、町中車のパラバラで埋まってしても、どうにもならんようになりませ。」

「どうにもならんようになったら、静かになってええやないか。」

「そんなムチャな。身動きできんようになりますがな。」

「どうしても困るいうんなら、車のパラバラを回収する収集車でも走らせて、片づけてまわったらよい。」

「その収集車がけとばされたらどうしますのや。」

「収集車がパラバラになったら、それこそ收拾がつかんね。」

車というものは、田舎では便利なものである。しかし、電車が家の軒下をかすめて走っているような都会では、まず不必要なものである。せっかくなつくた車をなるべく動かさず、たまに動けばすぐパラバラになるという私の案は、「そんなら車なんか始めからつくらんようにしたら

よいのではないか」という意見を、記者からひき出そうとしたものである。ところが、感覚のするどいはずの新聞記者は、だれもそこに気がついてくれなかった。そこで、しょうがないので自問自答することにした。

国鉄や市電を充実すれば、車はなくともそう不便なことはない。バスや消防車や救急車や霊キャウ車やらはあった方がよい。パトカーは、個人的希望を言わせてもらえば、ない方がいい。若者は自転車走らせ、50歳以上になると原付バイクに乗っていいことにする。なぜ50歳以上かという、これも少々個人的意見である。あと7年たてば、60歳以上にかえる。

こんなにかんたんで、今日からでも実行できることをなせしないかといえ、これをやると日本経済が崩壊するからである。車をつくらなければ自動車会社は倒産する。関連する鉄鋼・電機・石油等々の、ほとんどあらゆる大企業もまた、たちまちつぶれてしまうだろう。ついていこうと、国鉄はいまその身代りとなって倒産しかけているのである。国鉄労働者は、もっと大威張りでわけ前を要求すればよい。それはともかく、要らない電気を危険を承知でつくるための原子力発電所といっしょで、“日本経済”を破産させぬためには、いやでも車をつくり続けなければならぬ。

車をつくり続けながら、車のもたらす諸悪をなくすには、つくった車を動かさぬようにする以外にない。たまに動いてバラバラになれば、また新しい車がつくれる。かくて日本経済は万々才で、しかも公害や交通事故もなくなる。こんないいこと、ないではないか。

おどろいたことに、新聞記者は「なるほど」と納得してしまったのである。その結果、正月特集「車文明批判」は、何ともしまりのないものになってしまった。

人間が生きていくのに本当に必要とするものは、それほど多くない。ところが、要ろうが要るまいが、何でもたくさんつくらなければ社会が維持できなくなった。それが資本主義社会の本性である。その本性をかえず、害だけでなくそうとすると、カー・トレインとかバラバラ自動車といった冗談とならざるをえない。

社会の本性を変えることを「革命」という。私の若いころは、いまにも“革命”が起こりそうなふんい気があり、学生の多くは革命を起こしたくてうずうずしていた。最近の学生にうっかり「革命」などというのと、「革命って何ですか?」とまじめに問いかえされるか、鼻先でせせら笑われるか、どちらかである。「若くて、金がなくて、地位もない」のが革命の「三宝」だ、といったのは毛沢東だったが、最近の学生は、金は親からいくらかでももらえ、現在地位はなくとも将来保障されている、少なくともそう信じている。つまり、“潜在金持”であり“管理職予備軍”なのである。こうなると、暦の上での年齢は若くとも精神的には老化が進み、若さもなくなる。

どうやら学生は、「宝」を3つとも、とり上げられてしまったらしい。

私は、それほど金のないことと、精神的年齢の若いこと（よく「子供みたいなことを言うな。もっと大人になれ」としかられている）には少々自信はあるのだが、“社会的地位”が高くなりすぎて、革命には向かなくなった。何しろ、「日本生物学会会長」になってしまったものだから。

革命が期待できないとすれば、残る手段はただひとつ、なるべく早く行きつくところまで行ってしまふことである。車は石油で動く。石油がなくなると停ることになる。

車文明を平和的に崩壊させる道は、ますます車を走らせて、一時も早く石油をなくしてしまふ以外にない。私が最近車の免許をとり、寸暇を惜しんで走りまわっているかけには、かくも深遠な哲学的思索が秘められているのである。

編集局長補佐：それやったら、なんで550ccの軽自動車なんかに乗ってますのや。石油あんまり減りまへんで。

会 長：そのうち大型免許とって、大型トラックにネオンつけて走ったるから待っとけ。

## 映画「水俣病——その20年——」の感想文を読む

——センチメンタリズムからヒューマニズムへ——

加藤喜代志

### はじめに

私は7月初め、3回にわたって映画「水俣病——その20年——」を、授業の一環として上映した。この映画をみた学生の数は計300人ほど。私の授業に受講届を出している学生数の約6割。映画のあと20分ほどかけて、かれらに感想文をかいてもらった。かれらがこの種の問題にたいしてどのような受けとめ方をするのかを知るため、そして今後の授業のすすめ方の参考にするためである。そこで私は、8月末の1週間ほどをかけて、これらの感想文を読み、メモをとり、さらに文章化を試みた。それを本誌に寄稿するのは、そのことによって、本フィルムの上映を私にすすめ、かつそのフィルムを貸して下さった日本生物学会会長の奥野良之助氏にたいする私の感謝の気持ちをあらわしたかったからである。〈の結果、残暑きびしい現在、私はタイプをたたいている——会長〉といえ、学生の感想文をダシにつかって、この名だたる学会誌に「寄稿」するなど、それだけでゴウ慢なのに、それをもって私の感謝の気持ちを表わしたいとは、いつそんなにゴウ慢になったのだ、と会長から一カツされそうである。しかし温厚な会長に甘えて〈気持ワルイ!!——会長〉、私が常日ごろ会長から受けている有形無形の恩恵にたいするお礼をも含めて、この一文を本誌を通じて、学会員諸兄にお届けする不遜をお許し願いたい。

ところで、会長の恩にまだ少しも報いることもできず、またいつそれを果せるやもわからず心苦しい日々を送っているながら、〈ウソつけ!〉私は恥も外聞もなく会長の魅力にひかれて、クラシック音楽とコーヒー付の雑談を存分楽しめ、ときにはなにやら「不穏な話」に参加するハメにもなる金沢大学理学部生態学第1研究室にノコノコと足を運ぶありさまである。さしずめ金大の喫茶店「田圃」か「ウイーン」といったところ。あるいは17世紀半ばから18世紀半ばにかけて繁盛したイギリスの「コーヒー・ハウス」の如く、そこには実に個性豊かな人びとが談論に

情報交換にやってくる「真に開かれた学問的な、そして人間的な場」である。会長も「良れる」才媛、ホヤ研究で世界の注目を集めつつある<そして近くノーベル賞は間違いない>富家雅子氏もこの常連の1人であることは特筆に値する、ということは知る人ぞ知るである。ゴウ慢の誘りを覚悟で、いずれこの誌面を借りて、金大「コーヒーハウス」の常連の横顔を描いてみたいものである。<会長は“主”であって“常連”ではない> 始めから話が本題からそれてしまったことをご容赦いただきたい。

さて、この映画を上映することになった直接のきっかけは上述のとおりだが、授業の一環として上映したといったように、私はこの種の話の授業をしている。そこで私の研究教育について、これまた恥も外聞もなく、いささか告白めいたことも含めて、かんたんにかいておきたい。

私は数年前から教養課程の「政治学」の看板の下で、戦後の政治・経済の諸問題——たとえば占領期の諸改革や高度経済成長期の開発・公害・自治等の問題——についての話しに1年の半分を費してきた。「近代（西欧）」といえは、戦後しばらくを除けば、戦前を含めて克服・批判の対象となってきたが、ちょうどそのような折に私は、近代西欧の社会思想史、政治思想史を専攻し、17世紀イギリスの歴史の一コマで飯を食ってきた（食わせてもらってきた）。そういう私がなせいま、300年を飛び越え、ヨーロッパ大陸からアジア大陸を飛び越えて日本にやってきたか（従来の研究テーマを放棄したわけではない）については、ここではふれない。<ふれたら困ることがあるんやろ——会長>

授業でとりあげる問題は年によっていくらか異なり、同じ問題をとりあげるにしても、いくらかの変更やほりさげがなされるのは当然のなりゆきだし、<耳が痛いね> クラスによって重点のおきどころもいくらか異なってくる。周知のように、教養課程では文科系の学生ばかりでなく、理科系の学生もいるわけで、とくに後者のなかには、人文・社会系のある科目について勉強するのはこれが最初で最後という学生もめずらしくないだけに、話す方も聞く方もある意味で大変むづかしい。若輩の私がいくらかでも得心のいく話しができるはずもない。にもかかわらず、これまでとはかなり素材・内容を異にする（関係がないということではない、私としては、たとえば人権思想や社会変革の問題として、近代西欧の思想的諸問題と現代日本の上述の問題とは大いに関係があると考えている）話しをあえてするには、つぎのようなことがある。すなわちレジャー・ランド化し、公害問題のような政治的社会的問題を「お堅い」話題として敬して遠ざける学生の多い大学のキャンパス風景と、石油ショックをきっかけとし、80年代の幕明けと同時に急速に展開しはじめ、いままその表裏をみせない保守（反動）化の動きにつつまれたキャンパス外の風景とは、同じ風景のポジとネガの如くである。こんなことをいって今更なんだ、といわれるだろうし、自らもそう思うし、また口幅ったいのはあるが、このような状況に私は私なりに、一種のあせりに似たものを感じざるをえなかった。もちろん、自分のことをたなにあげて、

「今の学生は、自己中心的でレジャー志向が強く、政治問題にたいして無関心でシラケている」と慨嘆することはやさしいが、私にはその資格がないし、そのように慨嘆される学生のなかには、私（の世代）などにはとうていもちえないしなやかな発想と行動力を持ち、「いざ鎌倉」というときにも、かなりのしぶとさを発揮するかもしれない者も少なからずいるように思われるのだが、すでに「新たな戦前」がはじまってしまったように思われる現状において、上述のような問題を、「講壇」からのなにやら「高尚な」理論的問題としてではなく、身近なしかも重大な問題として、学生に話してもらう機会が「政治学」の授業に（かぎらないが）必要だという思いを強くしていったのである。現在の金沢大学の政治学の授業は、法学部からのひとりの応援をうけているが、学生数からいっても、またなによりも確保できる教師の教とその研究領域からしても 私の思いを恒常的に実現・維持していくことはむずかしい。以上のようなことから、無茶を承知で、できない話をし、時にレポートを書かせ、そのなかから一部の学生と面接して、学生の反応をみながら、また話しをすすめるという試みをおそろおそろ始めたわけである。私にとっては大きな負担であったし、今も負担であることに変わらないが、私なりにわずかながらも手応えを感じている。その成否や是非についてかくのもこの場でないのかかかないが、このような試みのなかで、開発と公害の問題が授業で最初にとりあげた問題であった。10年ほど前に初めて、机から離れて勉強した体験がこの乱暴な試みをする勇気を与えてくれたようにも思われる。それは長野県の観光（乱）開発の実態調査グループに参加し、レポートをかいたことをさす。

今年4月からの授業では、前半に戦後の諸改革とくに軍隊（戦争と平和）の問題、後半に開発と公害の問題をとりあげ、今までよりかなりくわしく水俣病問題について話すことにした。まず戦後の国土開発の歴史を概観したあと、講義用につくった年表にそって、水俣病問題（公害問題）の特殊性と普遍性を浮き彫りにすべく努めてみた。水俣病の恐ろしさ（医学的な面だけでなく、政治的社会的な面についての恐ろしさも含めて）をこの映画をみて初めて知ったとか、講義ではそれほどでもないと思っていた水俣病の実態に、映像を通して大きなショックを受けたとかいた学生が9割いたことに、私はあらためて映画の偉力を思い知らされるとともに、自分の講義の不十分さをつくづく確認させられることにもなった。とはいえまた同時に、この映画をみることで私の拙い話しもよく理解できたという学生もいて、いくらか慰められもした。しかしそういう私的な感情は今はどうでもよいことだし、水俣病問題の重大さからみれば、不謹慎でさえあろう。

前書きが長くなってしまったが、最後に、今回の講義の準備にあたって利用させていただいた文献をふたつだけ掲げておく。

宮本憲一編「公害都市の再生・水俣」（筑摩書房）

色川大吉編「水俣の啓示 —— 不知火海総合調査報告 ——」（筑摩書房）

(注) 以下の文中にある……は私による中略、〔 〕内は私がそう入した言葉ないし符号をそれぞれ示す。また ( ) 内の、たとえば教育・男とは、教育学部男子学生のこと。(文学部、法学部、経済学部、教育学部、理学部、工学部、薬学部、医学部)

(1)

先にもふれたように、この映画をみた学生のほとんどは、さすがに水俣病の悲惨さにショックをうけたようで、ある学生(教育・男)はこうかいている、「僕らの生活をふりかえてみて、自分の生活がいかにいいかげんなものであるかを痛切に感じてしまいました。……我々が自由に青春をおう歌している間にも、苦しんでいる人々がいるということに強い衝撃を改めて受けてしまった私です。……今、こうしている間も涙があふれてくるのを懸命にこらえています。初めてです。これほど強い衝撃をうけたのは、……“親を返せ。子供を返せ。人間は何のために生まれてきたと思うとんのか。あんたどもは。”僕はこの言葉を忘れられないと思います。」この母親のチッソ幹部への悲痛な叫びは多くの学生の心をとらえていたが、また学生たちとほぼ同年令の胎児性水俣病患者たちの姿もかれらの心を強くとらえたようである。ある女子学生は「その人たちのことを考えると、とてもいたたまれない気持ちになります。……私も女性の立場なので、子供を産むのが大変怖くなりました」といっている。つぎのようにいう学生(工学・男)さえいる、「なんと無ざんな映画であったのか。……もう最後のことを書くようだが、ただ一つあればいいのと思ったのは、生まれた時から水俣病にかかっている子供は、そのまま成長させるより、その場で安楽死させた方がよっぽどいいのではないか〔!〕ということだ。全く非人道的な事の様だが、あの映画を観せられては、こういう気持ちにもさせられるのだ」と。これがショックのあまりにかかれたにせよ、「臭いものにはふたをしてしまえ」という発想につながるだけに、寒気をもよおす。これと同じような発想に根ざしたような別の学生(工学・男)の言葉がある。かれは、「人間が猫のようにみえるなんて!」と恐怖し、「チッソはなぜ……水銀をまき散らしつづけたのだろうか」と問う。にもかかわらずかれは最後に突然、「とにかく人間どうし、愛し合っていきたい。あんな〔患者たちの〕抗議やデモ、座り込みなんて見るのもいやだ!」と罪のない被害者を拒絶するのである。身障者やデモ、座り込みは、それがどうして生まれ、行なわれたかをよく考える前に、それが自分に不快・けん悪の念をじゃく起するが故に、目の前から姿を消すことをもっぱら願うような「感情的」人間が多くないことを願うのみである。このふたりの学生とは反対に、「きれいごとだけでは社会は動かないかもしれない、もうきれいごとで動く社会はできないのかもしれないし、そういう社会はいつも動いている。汚いものは葬り去られるが、患者を汚いもののように扱う者達を果して許していいのだろうか。そう感じた自分を

許していいのだろうか」という学生（経済・男）や、「君たち〔胎児性水俣病患者〕は、決して二度とあやまちをおかさないように、その存在を明確に刻みつけておく義務〔！？〕があるのだ」という学生（この学生の「義務」という言葉使いにひっかかるが）たちに期待したい。また別の学生（工学・男）いわく「水俣へは行きたくない……ましてや、その土地で魚を食べるといったことは絶対にできない。今はしばらく魚は食べたくない。」このように、患者や漁民や水俣への共感を示すどころか、敵意に近いものさえ抱いているかのような拒否反応を示す学生も何人かいる。

チッソ幹部の誠意のなさや行政の怠慢にたいする怒りを覚えた学生はかなりの数にのぼる。そこにはたとえば、団交でのチッソ社長らの態度、顔、発言を「ムカムカしながらみている学生、「今まで、水俣病というものを先生の言葉や教科書などでしか知らず、……自分らには何も関係ないものである」と思い、そんなに深く考えたことなどなかった。しかし、今、このフィルムを見、話しを聞き、考えるうちに、ほくの心にも怒りの気持がこみあげて来た」という学生、あるいはまた、映画の最後にててきた何くわぬ顔をしてはいまわっていた、毒（水銀）を体内にもったタコとイカが「何となくあの頭のはけかけたチッソの社長に似ている」とからかう学生、その社長の顔を「何を考えているのかわからない……人間性喪失の時代のひとつの象徴」とみる学生たちがいる。

## (2)

ほほすべての学生たちが記していた第一印象としての「ショック」と「怒り」は、水俣病に象徴される公害病問題や社会的問題の「解決」に向けてどのようにかわるのか、あるいはかわらないのか、その点について、いくつかの型にわけてみることにしたい（実際には、複数の型を共有している学生が少なくない）。

まずこの映画をみて、これまでの自分を反省し、この問題を自分の問題としてとらえていこう、とらえていくべきだ、傍観してはいけない、なにかをしなくては、とつき動かされた学生たち。

自分とは正反対の状況に陥れられている人々の様子にすっかり「落ちこんだ」気分になった学生（経済・男）は、工場の人々が企業にしばられて何も言えないという場面をみて、「自分も、もうすぐ社会人になり企業の一員となるのだが、そういう企業にしばられて、正義に反する行為は絶対ゆるせないし、絶対してはいけないものだ。そして自分に、そういう時、強い力をもっていたいよとしていかななくてはならないと感じた。」別の学生（経済・男）は「我々はこの水俣病という人災に対して、傍観者の態度はとり得ない」のであり、「公害病などが発生した後、それを

恐れたり、かわいそうに思ったりするだけではだめで、それをおこさせないことが重要なのである。そのためにも、ふだんから、こういう問題に関心をもっていなければならないと思った」とかいている。学者・知識人は世の中の見張番にならなければならないのに、現実には企業や権力と結びついているやからが多いと嘆く学生（文学・男）は、自分がそのような社会の風潮に抗しきれずに主体性を失いそうだと不安を抱く。そして「だから、社会をみる目、物事を批判的にみる目だけは、大学生活のなかで何としてでも身につけ、社会の中に入れていっても忘れないようにしたいものだ」という。この学生によって「世の中の見張番」を期待されている学者・知識人の多くは今や、肥大化の一途をたどる軍隊と警察によって見張番を必要とするような社会・国家をつくりだすのに手を貸している、否本来この人種はかれら軍隊と警察と同様、国家権力の側に属していて、かれらが戦車やピストルなど物理的暴力でもってあからさまに「秩序」を維持ないしつくりだそうとするのにたいし、「知的暴力」によって巧みにそうする性向をもっているのかもしれないから、かれら学者・知識人への過度の期待も幻滅も有害無益であろう。だから私はすべての学生が「物事を批判的にみる目」だけは養って欲しいものだと、あらためてつくづく思う。

ある女子学生（法学）は「物事をよく考えず、すべて軽くさらりとかわしていこうという風潮にあるので、運動ということはとくに変り者扱いされますが（私も〔運動する人たちを〕変っていると思っていました）、まじめに物事を考えた上で、自分のとるべき行動を決めることが悲しいことをなくす方法だと思いました」といって、世の中をもっと偏見なくよくみていくことにしたようだ。薬学部の男子学生もこういっている、「社会全体の構造に問題を感じずにはいられません。……私たち国民ひとりひとりが、しっかりと世の中をみつめは握し監視していかないと、国は、社会はとんでもない誤ちをおかしてしまうような気がします。……私たち薬学・工業化学へ進む人間にとって、ひとつの教訓としなければならない問題であると身をもって感じました。今回のフィルムで、私は肝に銘じておかなければならない重い何かを得たような気がしました。」

このような反省や決意表明は、直接的に言葉としてではなく感想文の行間からくみとれるばあいも少なくない。これらの学生にたいして私が今いえることあるいはいいたいことはただひとつ、この気持（正義感のようなもの）を持ち続けて欲しいということである。かれらの前途には、かれらを「正義」に対立する状況に立たせてざ折感を味わせ、あるいはかれらに「開き直り」を陰に陽に促す多くの事柄が待ちぶせているからである。

### (3)

つぎに、悲惨であるが故に被害者には申し訳ないが、この問題にかかわりたくない、早く忘れたい、「正直、本音をいうと、僕の胸の内には水曜が速くてよかったという気持があることは

否めない」と逃避を表明する学生（経済・男）、またあまりの悲惨と問題の深さから、あるいは別の理由から、なにもできないし、したくもないという「無力感」におそわれ、最初にみたような学生たちの気持はとてども持続できないと告白する学生たち。かれらの数はかなり多い。

逃避や無力感を表明する学生も、一方ではチッソや国にたいして早急に誠意ある補償をするよう希望し、他方では世論形成に責任あるマス・コミや学者・知識人の無責任を追及している点で、他の型の学生と大差はない。

この型の学生の言葉をいくつかひろいだしてみよう。「今、映画でみたような現実を直視しなければならないことは僕にとってもつらいことです。……今みた映画の内容も予想しえたことです。知っていたから深く考えたくなかったというのが僕の正直な感想です。と言ったら先生は怒りますか。だってこういう現実をつきつけられてどうしたらいいの僕はただ途方に暮れてしまうんですから。人間的な叫びをあげることは僕にもできます。……けれどその一方で、おそらくまた再びこのような公害病やあるいは戦争などによる非人間的な悲惨なことが起きるだろうとどうしても思ってしまうんです。僕達にできることは一体何んでしょう。そう考えると僕はこのような社会的現実から逃避して、観想の世界に居すわり続けたくてしまうのです。」こう告白する学生（文学・男）は、そこで水俣病問題を資本主義経済体制の問題として「観想」〔?〕してみようとするのだが、「腐敗を極めた資本主義経済にたいして、現存の社会主義「国家」がなんらかの有効な答えを与えているとは思え」ない、とすれば「ではどうしたらよいかということは僕にはわからないのです」という。私はかれに腹を立てることはないが、かれがなぜそのような観想の世界にいつけたくなるように、物事をみることになったのかについて話を聞いてみたい。資本主義体制に社会主義を対置し、それに期待できないからといって「どうしたらよいかかわからない」というのは短絡的すぎるし、自国を社会主義体制に変革したわけでもなければ、それへの十分な取組みもしてきたわけでもないのに（その前に資本主義体制のなかでの徹底した民主化＝社会改造という課題があるように思うのだが）、そのように無力感におちいるのは「甘え」でさえある、というのかれには酷であろう。現存の社会主義国に期待をかけてきた多くのかれの先輩たち（私もそのひとりだった）も、多かれ少なかれ、かれと同じ状況にあるのだから。

かれとは反対に、冷酷にも水俣病問題を体制の必然的帰結として当然のこととし、さらにそこからチッソを擁護しようとさえする学生も何人かいる。水俣病問題を資本主義体制の問題としてとらえることに私は何らの異存もない。それを否定的にあるいは肯定的にとらえようとするにせよ、かれら双方に私があえて望みたいのは、「体制」ということからかれらが直ちに、そこに何か動かし難い怪物の力や厚い壁を想像し、そのために無力におちいたり、あるいは逆に、それ故にこれから自分がそのメンバーとなる企業の世界で、自分だけはうまくやるしかないんだと自己保身だけに没頭したりすることにならないよう、また既存のふたつの「体制」のイデオロギ

一対立の構図のなかでしか、その概念をとらえることのないよう、いかえれば「体制」なるものが現実の生活や労働の場で具体的にどのような態様をもってわれわれにたいして現象しているのかをとらえ、それらの連関のひとつひとつを自らの目で見直す作業からはじめるよう望みたい、くさしあたり、大学の先生を調べていじめることなど、いかがでしょうか——会長> それは一見、ささいなことであるかも知れないが、忍耐と勇気のいる作業であり、そのことによって地に足がついた議論が可能となるように思う。

話しをもとにもどそう。「患者の苦しみ、家族の悲しみを目にして確かに私は、同情とやり場のない怒りを感じずにはいられない」という学生（教育・男）も、自ら「この大きな問題をどうすることもできないし、やろうともしない」といい、「行動をおこすことなく大学を卒業して、工場や会社にはいって、職場中心の生活を送っていくことになるのではないだろうか。その場所がチッソのような工場でないとはだれにもいえない。」とあきらめとも開き直りともいえる言葉で感想文を結んでいる。水俣病問題は確かに「大きな問題」であり、それにひとりの人間がたちむかおうとすれば、「体制」にたちむかうのと同じように、実に気の重くなる、また気の遠くなる思いがするのは私も十分すぎるほどわかる。だからとやかくいえないが、この学生にむかっていえるのは、つぎのようないいふるされたことにすぎない。「大きい問題」だからどうすることもできない、と必ずしもいえないのではないか、「大きい問題」を、それこそマス・コミの種になるほどに大いに解決できるような行動でなければ意味がないと考えないこと、小さな行動も持続的にそしていたるところで行なわれれば、問題の解決に寄与するだろうし、同じような問題をひきおこさない力となっていくのではないだろうか。これはどんな「大きな問題」についてもいえることであると思う。ここでも忍耐と勇気が求められよう。

つぎのふたりの学生は、水俣病問題はつまるところ自分にとって無関係な他人事であるといっている。ひとりの学生（文学・男）はすでに小・中学校で水俣病についていくらか学び、石牟礼道子氏の文章を国語の授業で読んでショックをうけているが、今度はこの映画で「いいようのない地獄をみる思い」をしている。そして救済されるべき患者が、チッソや国・警察さらには企業城下町の市民からさえも救済をはばまれているのを見て、「弱い者いじめでしかないように」思うのだが、「自分にとっては結局、他人事であって、自分が水俣病にならないと本当の問題意識は生まれず、患者の訴えを無表情に聞き流す会社の人間どもと大して差はないのだろう」という。たしかに相手の立場にたって考えるのいうことはむづかしいことである。しかし人間には多かれ少なかれ相手の立場や行為に共感したり反感をいだいたりする感情をもっているのであり、想像力をゆたかにしてこの感情を洗練することで、十分問題意識をもちうると思う。おそらくかれは、あのようにいうことで自らの心の痛みをいやし無力感から少しでも遠ざかろうとしているのであろう。私はそう思いたい。かれは最後に、「何故、政治学という授業でこの問題を取り上

けたかよく考えてみる必要があると思った」とかくのだが、これが私への批判なのか、それともかれ自身の再考のためなのか、わからない。いずれかれ自身にきいてみたいと思っている。

もうひとりの学生（教育・男）いわく、水俣病患者が今もなお存在している事実を「知っている人があっても、その解決に協力しようと立ち上がろうとしないのである（私もその中の一人である）。その理由は“自分に関係ないことであるし、そんな関係のないことにへたに関わったりしたら、周冊の人々から、あいつはアカだなどと差別され、孤立してしまうのではないか”という恐れがあるのがほんとうであろう。また“今さら自分がたち上ったところでどうしようもないのではないか？”という無力感にとらわれているためであろう。」これはかれのみならず、割合多くの学生の本音部分のようだ。かれは全国のいたる所で、さまざまな要求をかけた、その実現をめざしている住民運動とその参加者をどうみるのだろうか、きいてみたい。

#### (4)

第三に、自分は直接的加害者でも被害者でもない、つまり第三者的ないし傍観者の立場にいるとして、水俣病問題を患者の立場にたつてのみ判断することを避け、したがってチッソだけを責めることはできないのではないかと、妙に「分別のある」ところを示す学生をとりあげよう。

先にもいったように、それぞれ相手の立場に立ってみることはなかなか容易なことではないが、そのような態度は一般的には好ましいことである。しかし水俣病問題にかぎっていえば、学生たちがチッソや国の立場にたつて、かれらへ同情を示すことには疑問をもたざるをえない。なぜなら、患者とチッソは初めから対等な立場ではなかったからである。かれら学生は両者の立場を理解しようとするし、できると考えているのだから、自分たちが五体満足で不自由でない生活を送ってきたこと、現に送っていることに良心の呵責を覚えさせし、一刻も早い患者救済をチッソや国に要望しているのはたしかだが、同時にかれらは「企業〔チッソ〕の〔補償金支払による〕倒産の防止にも力を注いでほしい」（経済・男）と思い、「もし私が病気の原因となった工場の側だったら、多額の補償金を払うなんてもったいないし、操業を停止して不利益になるようなことはしたくない、なにより工場で働く労働者を路頭に迷わせることはできない」（文学・女）と社長の立場に立つ。また「水俣病はチッソが悪いのだ、確かにそうである。しかし水俣病患者たちが、もしチッソの社長だったら、本当に有機水銀の完全な除去を行なったであろうか」（工学・男）という。このようにかれらは「企業の側の苦しい立場もわかるような気もしてしまう」（理学・男）のである。かれらはこのふたつの立場のあいだで揺れるのであるが、その揺れはまだ患者側の方に大きいようだ。

ところが、患者たちの絶望的とも（学生には）みえる行動についてのけん悪感・反感をあら

わにするに至って、意識的かどうかはわからないが、揺れはチッソや国の側の方が大きくなる。ある学生（工学・男）はこれといった理由を示していないが、患者たちの「抗議やデモ・座り込みなんて見るのもいやだ」と文を結んでいる。別の学生（教育・男）は、漁師が「漁師だから」といって、海が汚染されていることを承知で漁に行く事実を知って、つぎのようにいう、「そんなことを言っているその地域の人々自体の考えに、甘さや根本的な誤りがあると思って、自分はがゆい気持になった。……そっこく〔漁を〕止めるべきだと思う。「漁師」がなんだである。自分が水俣病の苦しさを語り、補償要求をしておきながら、そんな死よりもささいな理由で、海にでるなと言いたい。そのへんをわりきれないということが、人間であり、チッソの社長も人間であり、誤ちを犯すゆえんであると思った。」国の怠慢を批判し、チッソに甘いみかたをするこの学生とは反対に、水俣病の悲惨を知らず、今まで安楽に暮してきたことに良心の呵責を覚えたという学生（法学・男）は「しかしだからといって私は、これからの私の人生をすべて水俣病患者にささげていこうという気にはなれませんし、そのことで自分の生活を破壊されるのもかたがたありません。……チッソ工場関係者の人には、その一生をかけて患者に補償させるのは当然と考えますが、彼らが患者を十分に補償出来ないからと言って、国民生活を犠牲にしてまで、国側が賠償金を払う必要がないと思う」という。「私の人生のすべて」とか、「国民生活を犠牲にしてまで」とかいうように、この学生はいささか極端から極端へと話しをすすめて、自己と国をかばっているようによめる。

この映画を「あまりにもチッソ側の不策〔不作為？〕を攻撃しすぎている」と不満をのべる学生（工学・男）は、「発病を隠していた患者にも、事件を大きくしてしまった原因があるのではないだろうか」と、有機水銀をたれ流し続けたチッソと並べて患者をも批判している。もちろんこの場合、かれは全く誤っているというわけではないが、文脈からは患者批判に力点がおかれているように読めるから、私としてはこの両面批判は公正さを欠いていると考える。

相手の立場にたって考えてみることによって、結局のところ加害者を擁護する学生とは反対に、企業の立場に自分自身をおいて考えると驚きや不安をもつという学生もいる。「最も大きな〔水俣病拡大の〕原因は、やはり企業の利潤追求の姿勢にあった。それ以上にこわいと思ったのは、企業（集団）の中では、人間の道徳・良心などというものは、ふっとんでしまうということである。本来なら企業を攻撃し、患者の味方になるであろう労働組合、ひいては地域の住民までもが自分達の生活の安定のために、企業の味方になってしまう。」（工学・男）「一度、企業の中の人間になると、あれほどごう慢で冷淡な動物になり得るのかと思うと、ある種の恐怖を禁じ得ない。自分もあの状況に置かれたら、良心とのかっ騰をくり返しながらも、表面的には一人の社会人として、無表情に患者と対応することになるのだろうか。正直なところ、自分でもわからないが、自分の行動・言動に対して責任逃れだけはしたくない。社会を知らない青二才と言われ

るかも知れないが、それだけはかたくなにでも守っていきたいと思う。」(法学・男)

(5)

第4の型としてとりあげる学生の数は少ないが、水俣病や公害の問題にたいしてシニカルなあるいはニヒルな態度をとる学生、さらにはいささか跳発的ともうけとれる学生をあけておく。「いつでも〔大学入学前までの学校の授業のとき〕公害というものを……ただ単に社会に出てくる暗記の対象としてのみとらえてきた」学生(理学・男)は、この映画を「戦争ドキュメンタリーのように〔自分自身の生活から遠ざけようとし、そのことを考えることを無理におしこぼすように〕とらえたく思っている」といい、さらに続けていわく、「今の社会では公害問題というのは、ほんの一部の人達の問題であり、裁判所の判決等が出る時に限って、テレビなどのマス・メディアを通じて入ってくるだけで、それもすぐに他の問題(ニュース)に座をゆずり、私たちの脳裏から消えていってしまっている。……僕はこういうもの〔公害や戦争および身障者を対象にしてつくられた放送物〕を……意識的にさげようとしてきたし、今後もさげるだろう。今回の16ミリを見ても僕の考えはかわらなかった。」とはいいながらかれは「19才という年になって……〔これらの問題を〕もっとくわしく調べ勉強し、自分なりの……考えをもちたく思った」ともいう。しかしこれも「頭の中での話してあって、やはり僕はこのような問題にはさけて通ってしまうだろう」というのだから、読む方はふりまわされてしまう。(誤字も含めて、この類の文章は実に多いから疲れてしまう)

「水俣病という言葉は、最近ではトンと聞かず、完全に記憶の彼方に追いやられてしまっていた」という学生(法学・男)は、この映画をみて色々と思いだしている。昔、コマーシャルでみた有明海のムツゴロウにも「悪魔を潜めていたのかと今にして思い」「あのきれいとはいえないサイ川の水の中にも、何らかの悪魔が潜んでいるのかもしれない、また自分の故郷である福井、その南部、小浜湾では原発が達ち並び、海がまた別の悪魔に汚染されているのかもしれない。……自分も、あの原発のそばで泳ぎ、魚も食った。きれいな澄んだ水であったし、刺身もこの上なくうまかった。しかし現実には、あの周辺でも放射能でやられた人がいるというし、水俣病のように拡がる恐れもある。」そしてベトナムでの枯葉剤使用、イラ・イラ戦争での細菌兵器使用、「恐るべきことである。」そこで水俣病にもどったかれは、それを「一方的な〔チッソによる患者〕だまし討ちであり、これは戦争よりも卑きょうなことである」という。かれによればそのようなことが行なわれるのは、他の事件にもみられるように「事実を認めて補償しようとしないう日本人の態度のためであり、「いつまでたっても、日本人はチッソと同じなのである。」こうしてかれは、水俣病問題の原因・責任を日本人全体さらには人間一般にまで拡大(解消)してしま

うのである（第3の型に分類できるかもしれない）。かれがこのことの意味をどれほど意識しているのかはわからない。かれはこう文を結んでいる、「彼ら〔患者たち〕は人間として生まれてきたのであるから、人間として見なければいけない。特別視ということはいけないのであろうと思うが、どうもそれもできない。実際、関わった人間でない自分には、残酷のようだが、彼らを同じ人間として見ることはできない。踊り猫と同じようにしか見ることができない。興味本位でしか見れない。こんな自分が実に悲しい。こんな人間はどうしようもないだろう。とはいっても世間の人々も大体こんなものではないのだろうか。人間というのは、地上で生まれた動物の中で最も醜い、汚ない、冷たいどうしようもない生き物、悪魔そのものなのだ。」

別の学生（理学・男）も、「直接の責任はチツソに、そして監督を怠った国・県にあるとしても、もっと根本的な問題は至極平凡な人間自体にあったのかもしれない」といい、静岡県掛川市での新幹線駅誘置にからむ「強制寄附」のことをとりあげる。そこでは「大多数の人々が、何の疑問も持たずに寄付に協力し、少しでも異議を唱えようものなら〔その人を〕一斉に白い目で見ろ。」このように日本人は「人間の尊厳に対しておそろしく冷淡である。日本人全体が水俣病を生んだのである」とかれは嘆いた後、「識者たち」および国民に矢を射る。「判決後、識者たちは続々と、チツソ・国側から離れ、国民世論も患者側へとかたむいた。いかにも「自分たちは正義の味方ですよ」という顔をして。自分たちのまちがいに気づかず。」私はかれ自身がすでに「評論家（識者）」になってしまったのではないだろうかと思える。

このふたりの学生のように、水俣病やその他大きな公害問題の原因や責任を国民各人に求めることは、全くの誤りとは思わない。そのような自覚も必要だと思う。しかしそれでもなお、水俣病問題についていえば、責任はチツソにもっぱらあるのであり、行政府にあることに変わりはないのであって、それには「太平洋戦争」の責任がまず為政者にあり、かれらに踊らされあるいはかれらに和して「お国のために」戦った「一億の国民」が総ざんげすることによって、為政者の責任が解消されないのと同じことである。そうでなければ、水俣病の問題は国民各人の責任にあり、戦争が国民全体の責任にあると試みてみたところで、事態をあいまいにし、責任をあいまいにするだけであることは、多言を要しないことと思う。このことはあらためて、われわれが銘記しておくべきことであろう。

「森ら万象に意味づけしようとする試みはいつも虚しく思われ」「一切は無意味な現象である」という学生（法学・男）は、したがって「善も悪も存在しない、因ってそうした判断を為すべきではないし、他人に強要することもない、という方程式を自らに課すことにした」そうである。「こうした目で水俣病の映画を見て、かれはいう。「もし仮に幸福という人の主観に依存するものが価値をもつのだとしたら、その為には人は健康であるべきだろうが〔！？真意をはかりかねる〕……ほくには、今ほくがこうやって書いているのも、水俣の人々が病の床に伏してい

るのも、チッソの社長の不誠実とも解される応待も、すべての現象が宇宙の始めから予定されていた事柄であるような気がして仕方がないのである。」<善悪の判断を放棄した人が“法学部”を選んだところが面白いね——会長>〔そんなこと面白がってもらったら困る——加藤〕

もうひとりだけとりあげる。「公害の起る必要は、本当はないのであろうか。」〔! ?〕この言葉は「高度経済成長の中で育ち、“ものが在る”ことが当然となっている自分に、ただのヒューマニズムにおぼれた感想は書けない」という学生（法学・男）のかきだしの言葉である。さすがに私は自分の目を疑った。しかしかれは「水銀をたれ流す代償として我々が得てきたものも又、大きい」として、得るもののために払う代償（犠牲）は当たり前という。もし得る人と代償を払う人とが同じであれば私も納得できるが（上述の学生のように、日本人として、人間としてたしかに同じであるが、重要なのはまず、個人としての人間、個人としての日本人であるはずだ）、少なくとも水俣病問題については、とてもそういうことはいえない。かれの言葉を続けよう。かれは、科学技術文明がもたらした公害によるその文明の破産宣告が「アウシュビッツによる芸術の破産宣告」〔?〕とともに、自分に「人間への失望」を与えたという。したがってかれには「科学技術の力が水俣を救えるとは思えない。……水俣〔病に代表される公害〕を防ぐためには、高度成長をあきらめなければならなかったのではないのか。そして今の自分の幸せは、高度成長に負っているのではないか。どうしても、自分には水俣を絶対悪として〔?〕その存在を否定できない。」このようにかれは、そこから自分の幸福をひきだしている高度経済成長（低成長であれ安定成長であれ、環境を無視したり軽視したりするかぎり、それは高度成長の発想と同じである。低成長を資源枯渇問題のみならず環境保護政策のせいにする連中が少なくないのは、石油ショック時にかぎらず、今も基本的には同じである。）の産物たる公害を肯定し、「病気と同様、公害とも共存していくことを、目ざすしかないのではあるまいか」という。<この学生に、科学の進歩のための人体実験を頼もうかな——会長>

シニカルなあるいはニヒルなみかたは、時と場合によっては、熱狂に冷水を浴びせ、警告を発して、事態の極端化の歯止めとなるが、それとともにまた、よりしばしば、好ましからざる現状を是認し、事態の正常化の歯止めともなるように私は思う。かれら学生がそのようなことを意識してかいたとは思われないが、いずれにせよ、それを読む側、受けとる側がそのようなことを意識することは必要であろう。それにしてもかれらの言葉は、今の支配層をニヤリとさせることであろう。

## (6)

最後に、水俣病問題に象徴される公害問題の解決について、学生がどのように考えているか、そのいくつかをみてみよう。すでに、多くの学生がチッソや国などによる早急な患者救済・補償を要求・希望していたことにふれたが、ここではまず、現今の日本の保守的風潮に適合的な「合

理的」解決策を紹介する。これは他の多くの学生の感想文と比べて、それなりのまとまりをもっていて、私にとってはある意味で「刺激的」な感想文である。

かれ（経済・男）も、自分の予想をはるかに越えた水俣病の惨状に驚き、チッソに対し「被災者に対する補償に真面目に応じ、これ以上事態をエスカレートさせるべきではない」というのだが、その理由は他の多くの学生のように、いわばセンチメンタリズムやヒューマニズムにあるのでは全くない。かれのいう理由は、それがもたら「国益」〔！〕なるものと「資本」にとって合理的な行動であるからにすぎない。私は戦争中の大河内一男の社会政策論——労働力保全論——を想起したが、そこにこめられていたかもしれない体制変革（民主化）などは、この学生の頭には全くない。かれは私の授業（現状分析）に常々不満を抱いていて、それをぶつけてくるが、かれは現状を、不十分ながらも日本の本来の姿にようやくもどりつつあると、保守化傾向を強める日本を積極的に肯定する。そこには、かれの感想文にもみられる対東南アジアへの優越意識やかれの軍拡論の前提にある反ソ感情が横たわっている。

ところで、水俣病をひきおこすことによってチッソはばく大な費用（補償金、裁判費用等）を負担することになったが、これはかれによれば、「チッソ否あえていうなら日本の企業家が陥りがちな近視眼的な利潤追求に対する自然の報復であった。」

この報復にチッソがどう対応すべきかといえば、「資本」の利益と「国益」の観点から、「補償に真面目に応」ずることと、公害輸出をすること！！である。この学生は「真面目に」こう答えるのである。少し長くなるが、かれの文章を引用することにする。

「短期的な利潤に目を奪われて、環境を汚染し、将来において貴重な労働力となるであろう多数の日本人を不具者としてしまった事は、中・長期的な国益と相反するものであり、人命は札束ではつukれないという事実から考えても、それを一時的な利潤の犠牲とすることは非合理的この上ない事である。チッソが真に資本主義の原則である〔資本の〕合理主義を信奉するものであるなら、被災者に対する補償に真面目に応じ、これ以上事態をエスカレートさせるべきでない。全面的対決になれば、患者側は過激に走り、裁判では飽き足らず、テロに走る危険性が皆無ではなく〔！！〕、万一、そうなった場合、一企業の利益はおろか、国益に対しても大きな脅威となるからである。そしてチッソは日本国内における生産を廃止し、工場施設を東南アジアや韓国などに全面移転させるべきである。日本の現状（高賃金、公害規則 etc.）の下では、化学工業という、すでに過去のものとなった産業に執着する必要性が見出せず、万一、公害病が発生した場合は貴重な日本人の人命が奪われるからである。将来にわたる国益〔これで3度目〕を考慮した場合、チッソのやり方ははなはだ非合理的である。よって合理的な解決を切に望みたい。」

かれは「万一、公害病が発生した場合は」というが、それは万一ではなく、すでに東南アジア各地で、日本の企業進出によりひん発しており、多くの公害病患者が発生しているという報告

が数多くだされているのである（授業においては、時間的制約のため詳しく話すことができなかった）。ただ、東南アジア諸国の多くは軍事政権や独裁政権が多く、その下では真相公表も命がけといわれ、反対運動は事前・事後に弾圧されるというから、そしてそれを認めることは日本と関係からいっても、政権にとって得策でないから、対外的問題にならぬうちに芽をつまれ、われわれ日本人の目に見えにくくなっているだけで、みようとせば、報告書等を通してみえるのである。この学生はそういうことを知らないのか、それとも知らぬふりをしているのだろうか。それにしても、老朽化したかかれがいう化学工業やその施設を他国で動かせば、公害はおきないともいうのだろうか。そして万一それがおこっても、貴重な日本人の人命さえ助かれば、現地人の人命は奪われてもかまわないとかかれは真面目に考えているのだろうか。どうもそうらしい。国益と資本の利益のためには、ヒューマニズムはその障害物でしかないのだろう。そして残念なことに現実の日本の経済進出（侵略とすべきかもしれない）はこの学生が期待するかたちですすめられてきたし、今もそうである。（全てとはいわないが）。私はかれの議論を「現今の日本の保守的風潮に適合的な」ものかいたが、これがかれひとりのものであって欲しいと願う。しかし、すでにみてきたいくつかの例から推測しても、かれほどあからさまではないが、かれの考えと通ずる学生は皆無とはいえないように思う。

私は9月中旬に、かれを含む何人かの学生に面接し、感想文をもとに、かれらと議論することになっているが、これまでの経験からしても、私の予想（憂え）は大きくはずれることはないと思う。学生と教師の接触が求められているはずなのに、近年めっきり、議論をふっかけに、あるいは雑談に研究室を訪れる学生が少なくなって、否皆無になってきたこともあって、レポート等を出させた折、何人かの学生を呼びだしては話し（あまり議論にならないのが実情だが）をすることにしているが、あまり愉快なことではない。呼びだされた学生もあまり喜んでいる様子でもない。

水俣病など公害病は結局のところ、現代の化学技術によって拡大防止は可能だし、再発防止を期待したいという学生（工学・医学・男）がいるが、そのものは中性的な科学技術も、軍事技術にみられるように、それが主要にはだれによって担われ使用されるかによって、その可能性や期待は「夢」にもなれば、「悪夢」にもなることを忘れないように、この学生たちには望んでおこう。

「かつての国民の公害運動への関心は、もっぱらマス・コミのせん動によるものであった」が、「現在、マス・コミは公害に関する何の情報も与えてくれない【というのはいいすぎだが、その量と熱意が低下したことは否定できない】」とマス・コミに不信を抱く学生（経済・男）は、映画をみて、患者、地域住民が本当に望んでいるのは、かれらが「安心して、偏見をもたれることなしに住むことができる共同社会の設立……彼らが安心して治療できる共同社会の出現」で

あり、これこそ真の水俣病対策と思われるといっている。私もこの学生の感想に同感である。かれもいうように、補償金、治療費も重要だが、そのような金だけで解決できるものでないことは、多くの学生が感動していた映画の中での親たちの叫び、「金はいらない、子供をかえせ！」が示している。多くの公害問題（それが現実におこってしまったばかりでなく、将来、相当の確実性をもっておこるものも含めて）が、この補償金問題にすりかえられ（なかにはやむをえず被害者自身によって、あるいは自分だけは被害にかからないと信じて、うまい汁を吸おうとする人びとによって、しかし大部分は加害者によって）、根本的解決がうやむやにされるケースが多いために、抽象的ではあるが、かれのいう共同社会という視点は忘れられてはならない。

かれがもうひとつ映画の感想としてかいているのは、先の学生とは正反対に、「現在、日本の多くの企業が東南アジアへ進出し、かつての高度成長時のような生産第一主義に基づく経営を行なっているが、日本企業は、そこでも又、第3、第4の水俣病を発生させるのではないだろうか。そういうことまで危惧させられる映画であった」ということである。

#### お わ り に

私がこの文の副題を「モンチメンタリズムからヒューマニズムへ」としたのは、それほど深い思想的理由があつてのことではもちろんない（そんな理由などあろうはずがないという会長の声が聞えてくるようだ）。＜そんなことをいうほど深い思想などもちろんない——会長＞ほとんどの学生がこの映画はショックを受け、被害者への同情と加害者への怒りないし憎悪を示していたが、にもかかわらずその半数以上の学生は、この感情の持続に自信がもてず、自分の問題としてとらえていくことの不可能性を感じているようにみうけられ、なかには好ましくない意味でのナショナリズムをまるだしに、似而非なるヒューマニズムをもって問題の解決を望むものさえいた。後者を除けば、私にはかれらを非難する資格が十分あるとはいえない。われわれをとりまく社会をみれば、私も学生たちと大差ないであろう。＜車の免許、取りにいくだもんね——会長＞〔そそのかしたのは会長じゃないか——加藤〕しかしだからといって「ケンカ両成敗」よろしく、自分を第三者的立場において安心立命できるほど、私は確たる思想をもちあわせているわけではない。ただ第一の型の学生の感想を紹介するところで私が期待したように、私自身も含めて学生の多くが、この感情をもち続け、さらにそれを日常生活に生かしていくためには、個人としての人間の尊厳を、いかにすれば不可譲の人権にたいする感覚をとぎすまし、それも血肉化する絶えざる努力を怠らないことが必要であろうと思う。このことがなければ、単なる一時的なあわれみ、怒りは、自己の免罪と、時にはマス・コミの好餌にはなっても、問題の解決にとって有害無益となることさえあるように思われる。したがって学生たちがショッキングな場面に出く

わして、一時的感傷におほれることなく、人権感覚に裏打ちされた恒常的な、人間解放にむけての自己展開をとけて欲しいとの期待をこめて、そのような副題をつけてみたまでのことである。

最後に、少々弁解じみたことをかかせていただく。この文章はアンケートにもとづいたものではなく、300人ほどの学生の個々の感想にもとづくものであるから、十人十色とまではいかなくとも、それを5つほどに区分して語り（紹介し）尽されるものではない。しかしそうでもしないかぎり、ある一定の紙幅のなかで、＜当学会誌は“紙幅”の制限なんかしてないよ。陰に陽に圧力を加えることはあるけどね——会長＞できるかぎり多くの学生の考えを伝えることはできないということはご理解いただけたらと思う。だからといって逆にすべての学生の感想を紹介するのは、読者に迷惑＜会長にもね＞であり、私の怠慢をさらけ出すことでしかない。

区分はそれほど正確な基準があるわけでもなく、私の主観・好みも潜入している。しかしそれでも以上のように区分して大過ないように思っている。問題があるとすれば、私のつまらないコメントにあるだろう。それについては読者諸兄のご叱正をおおきたい。もうひとつ心配なことは、学生の感想文からの引用が文脈や真意からはずれてなされているかもしれないということである。私はそのようなこそないよう、多くの混乱した文章（ショックのためか短時間にかいてもらったためかどうかわからないが）を極力より正確によみとろうと努めたが、誤りを犯していないとは断言できない。もちろんだからといって、この拙文に私が責任を負わないということではない。

韓国全斗煥大統領来日の「忌」念に

1984年9月6日

<< 生物学誇大辞典 >>

すうがくしゃ（数学者）：数学なる学問を研究している50歳以下の人の名称。何となれば、ケンブリッジ大学の G. H. ハーディ教授の説によると、「50歳を過ぎた数学者はいない」とのことだからである。数学とは論理思考の学であり、ハーディ教授は50を過ぎたころ、脳の中の論理回線があちこちで切断したのを自覚したにちがいない。もっとも、50歳まで持ったというのは大変立派であり、人によっては30歳で切れた数学者もいるし、初めから一度もつながらなかった数学者も存在すると思われる。（→せいぶつがくしゃ）

<< 書 評 >>

「睡眠革命」—— われわれは眠りすぎているか ——

メイ・レディス著 井上昌次郎訳 どうぶつ社 1984年 1500円

我々はなぜ眠るのか？ こういう質問をしてみると、ほとんどの者は、休息のためだとか疲労回復のためとか答える。他の答え方をする人も少し問いつめてゆくと、結局は疲労回復のためということになる。睡眠は起きて活動していた間の疲労をとりさり、再び活動を可能にするためのものというのが一般の通念であるようだ。まことにこの考えは我々の実感にかなったものであるし、また睡眠研究者の間でも一般的な考えである。

ところが、レイ・メディス氏によれば、上記のような考え方（睡眠の回復説はただの思いこみにすぎず、我々の約8時間の睡眠は、過去の進化の産物である睡眠本能が概日リズムによって我々に強制するものであって、睡眠が何らかの疲労によってひきおこされるものであるとか、睡眠の作用に帰せられる何らかの回復過程が存在するとかの証拠は、まったくないというのである。

睡眠が何らかの回復作用と関係が無いのならば、人間を含め多くの動物は眠るのだが、彼らは何のために眠るのだろうか。それは、エネルギーの節約、環境のさまざまな影響からの断絶、危険からの逃避のため、つまり、生活に必要な活動をすませた後で、残りの時間をよけいな事をしないでじっとしてすごさせること、これが動物と人間の歴史のほとんどの期間を通じての睡眠の役割（睡眠の不動説）であると言う。

では、夢はどうだろうか。夢には精神的な安定化作用があると言われてきたが、これも幻想にすぎない。人間および他の恒温動物の睡眠には脳波等で区別できる2つの相（レム期とノンレム期）があり、その内のレム期に夢を見ることは一般によく知られているが、レム期は体温調節等が不安定になり、恒温動物にとっては危険な期間であるらしい。このレム期は変温動物であるハ虫類の睡眠をひきついだものであり、ノンレム期が恒温動物になって発達した危険のない睡眠なのだが、過去の進化の結果として、ノンレム-レムのくりかえしのパターンができあがっているのだという。これもまた、レム期の方が新しいという多くの睡眠研究者の説とは逆である。以上のようにレディス氏は、新鮮で納得させられるところの多いアイデアで、今までの睡眠についての考え方をまったくくつがえしてしまったのだが、彼の睡眠不動説の重要な結論は、睡眠は、眠ってすこすべき危険をすでに持たなくなった「現代の文明化された富裕な人類」には必要ではない、ということであり、睡眠をとり去っても何ら不都合なことはない、ということである。眠

らなくてもよいのなら、人類は8時間のよぶんな活動時間を手に入れることが可能と考えられるし、睡眠にかかわる様々な不愉快な事柄や病気（不眠症、ナルコプシー、睡眠時無呼吸症など）の治療方法に新しいやり方——睡眠をとりさること——が考えられると言う。

なるほど、この説自体だけでも、不眠症患者にとっては大きなすくいとなるかも知れない。眠れなくても死なないのだと思えば、案外眠れるかも知れないからだ。しかしながら、不眠症患者はただ眠れないというのではなく、精神的な悩みをかかえているのが普通であり、他の患者にしても、ただ睡眠をとりさることだけでは根本的な治療にはなりえないだろう。そして「現代人類」も、逃れたいストレスをたくさんかかえており、睡眠の必要性は無くなっていないと思われる。

また、今の社会の中でのこの説の持つ危険性は、睡眠まで、「現代の文明化された富裕な人類」のものと、そうでない人類のものとに分化させ、そうでない人類は睡眠の自由さえうばわれかねないことである。＜眠る必要はないのだから、もう少し働いていただきませんか。などとエライ人に言われるかも知れない、ということです。—— 会長＞

そしてこの説の最大の難点は、回復説と同様直接的証拠のないことであり、メティス氏のあげたもっとも有力な証拠である、睡眠の非常に少ない人の存在にしても、状況証拠でしかないということである。

(チ　ピ)

<会長読後感：寝るほど案はなかりけり。起きて働くアホもいる>

<< 生物学誇大辞典 >>

せいぶつがくしゃ（生物学者）：生物学なる学問を研究している人のことをいう。  
したがって、当会の会員はすべて“生物学者”である。しかるに、金沢大学の奥野良之助助教授は最近、「50歳前の生物学者はいない」と宣言した。論理でなく経験の学である生物学は、少なくとも50年の蓄積を必要とする、というのがその理由である。ちなみに、当会会長は今年53歳である。（→すうがくしゃ）

<< 新聞記事から >>

“割りばし論争” そのあと

本誌前号（第18号）で、農水省の三沢林産課長と製造業者横溝氏との“割りばし論争”を紹介した。三沢課長が「割りばしは木っ端でつくるから資源浪費ではない」と主張したのに対し、横溝氏は「割りばしは木っ端ではなく立派な丸太からつくっている」と、その誤りを正したわけである。その紹介の最後に私は、「それにしても横溝氏に対する三沢課長の反論、あるいは弁解、を是非聞いてみたいものである。それを出すことは、“大朝日”の責任でもあろう」と書いておいた。

それが聞こえたわけでもあるまいが、“大朝日”は6月15日から「シリーズ 割りばし」という連載をはじめた。ところが、この記事は、金田平 日本自然保護協会理事が同じく「論壇」に投書した「使い捨ての割りばしは内外の森林資源を食い荒している“森食い虫”」という反論を対置しているので、問題の焦点がぼやけて何ともしまらぬ記事になってしまった。とは言え、こちらも乗りかかった船、かんたんに紹介しておくことにしよう。

「シリーズ 割りばし」6月15日付：緑復活へ使わぬ運動 —— 竹製持ち歩き節約

日本の木材輸入が東南アジアの森林を破壊し、さまざまな害を与えていることを見て、常に竹製のはしを持ち歩いて割りばしを使わないようにしている、神戸大学医学部岩村昇教授の話。岩村氏はまた、10せん節約する度に1本1000円のクスノキの苗を買って東南アジアへ植えているそうである。

6月16日付：「持ち帰り弁当」で消費量急増 —— “おふくろの味”どこへ

「小僧寿し」と「ほっかほっか亭」ができてから、割りばし消費量が急増し、子供のお弁当から“おふくろの味”が消えてしまったという、あまり関係のないお話。

6月17日付：増える反「使い捨て」派 —— 日常生活の見直しから

宮崎美子氏ほかの人々が、やはり東南アジアの貧しい生活への反省として、生活からムダをなくす運動の1つとして広げているというお話。

6月20日付：放置され、荒れるマツ林 —— 本当の森食い虫は別に

割りばし産地の中国地方では、樹齢50年、直径30センチのマツ丸太から割りばしがつくられている。ここでもマツ林は荒れてきているが、割りばしのせいではなく、真の森食い虫は、「県の行政」であったという話。

6月21日付：材料の広葉樹大ピンチ —— 産地北海道で年々減少

割りばしの半分以上を生産している北海道でも、材料の広葉樹林が減り、針葉樹の人工林が増え、ソ連、カナダ、アメリカの外材にたよるようになったという話。旭川営林署が「針葉樹中心の造林は長期的展望の誤り」と自己批判したらしい。お役所の自己批判というのは珍しい現象である。もっとも、針葉樹材の値段が下り、家具材として広葉樹材の需用が高まったのが、その原因である。10年ほどしたらまた自己批判するかも知れぬ。

6月25日付：失業増やす日本の関税 —— 低コストを支える貧しさ（インドネシア）

ジャワのある割りばし工場がその地域の人々の生活を支えているという、インドネシアからのレポート。割りばしに関税をかけたり、日本人が節約したりすると、インドネシアの人たちが失業するという話。

6月26日付：人口増が生む森林破壊 —— 対日輸出、荒廃に拍車（インドネシア）

1億5000万人もいるインドネシアでは、畑や燃料のために森林を食いつぶしている。日本の輸入もそれに拍車をかけているという話。

記者の結論（らしきもの）：アメリカ政府の報告書「西暦2000年の地球」は、2000年までに発展途上国の熱帯林の40%が消滅すると予測している。インドネシア政府も緑の保全を重視しはじめた。実効があがるようになるまでは、長い年月がかかるだろう。少なくとも日本人は、資源を大量消費することで東南アジア諸国の努力をむなしくしてはいけない。

<割りばし、使ってもええんか、いかんのか、はっきりせい！ 怪人21面相>

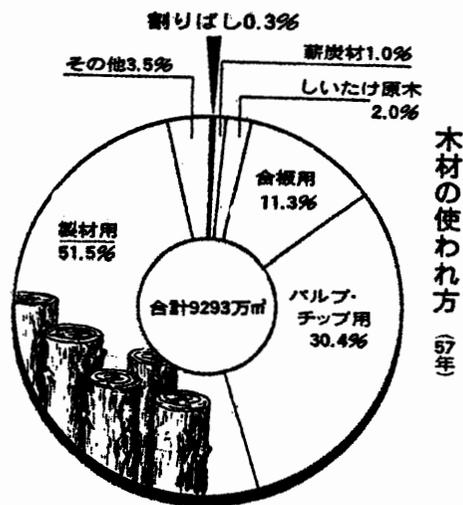
この一連の記事で、はっきりしたことは次の2つである。

① 割りばしは“森食い虫”としては無能である。

もっと有能な森食い虫がいる。（右図参照）

② 割りばしは木っ端ではつくらない。

①は、日本自然保護協会金田理事の主張を否定している。②は、農水省三沢林産課長の主張がウソであることを示す。この連載は2人の論争からはじまった。そして2人ともウソをついていることがわかった。にもかかわらず、2人に対する批判が全くなく、2人の反論もまたない。この連載がしまらなくなったのも無理はない。まあ、両者とも反論の仕様はないだろうけど。なお、このあと三沢課長を含むしめくくりの座談会が載った。スクラップしそこねたのでくわしくは書けないが、見開き2ページのそ



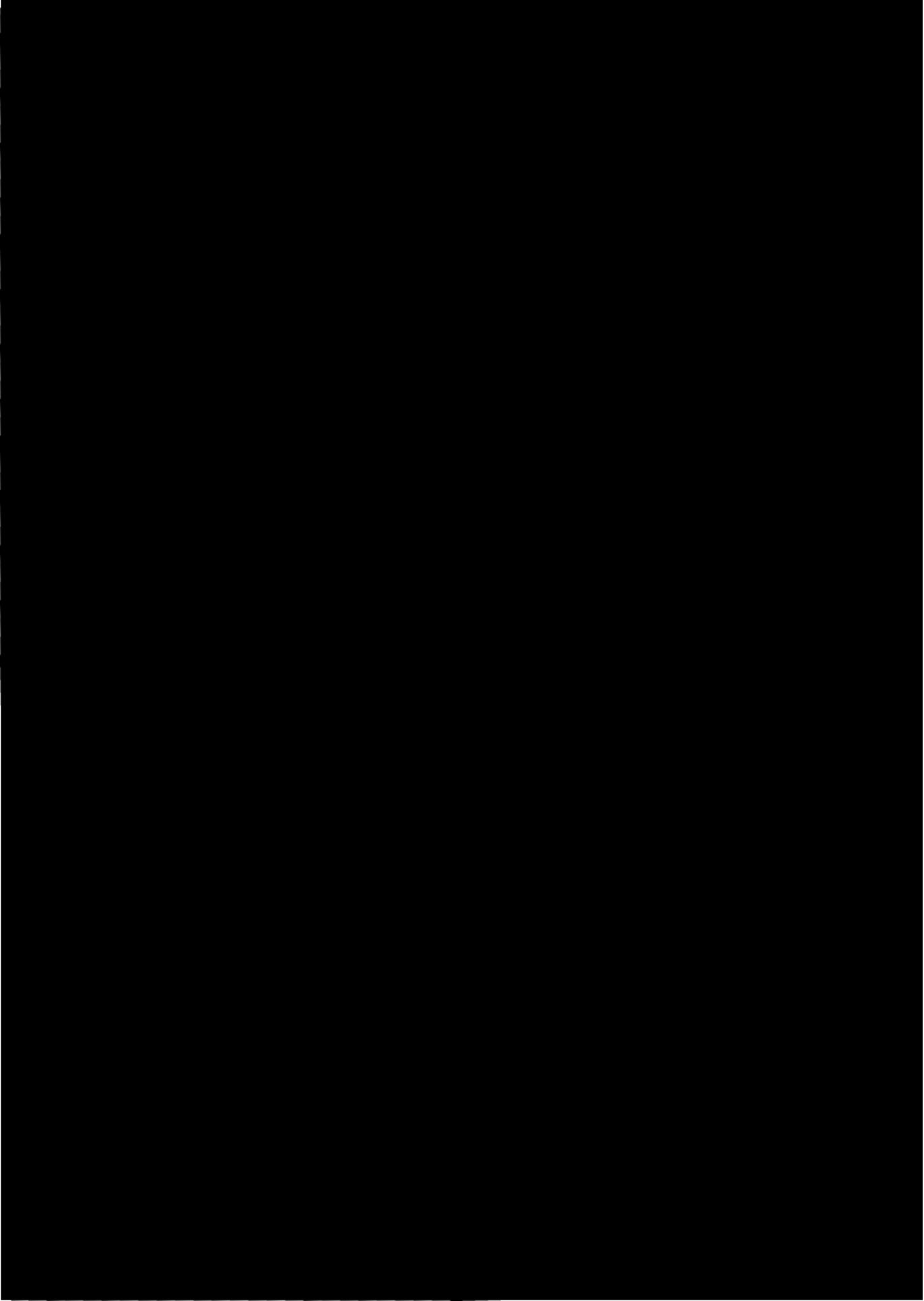
の座談会の中で、三沢課長は自分のついたウソに一切言及せず、また他の出席者もそのことにはふれなかった。

この論争は、三沢課長のウソをするどくついた、横溝氏の主張をとりあけるべきであったのである。そうすれば、真の“森食い虫”である日本の林野行政の実態がうきほりにされたにちがいない。

ところで、三沢課長は、ウソまでついて割りばしを擁護したのだろうか？ その答は、同じく“大朝日”の9月18日付に載っていた（次ページ参照）。それは、「みどりの決算——どうなる日本林業」という連載記事の5回目で、その表題はずばり「木を使おう。」いま、日本では「木」は余っていたのだった。

もっとも、そのうちまた足りなくなるだろうが。

(野 良)



<< 編集者への手紙 >> (その1)

さっそく今年度の学会費千円、お送りします。小生も就職して4年目、現在も〇〇〇養護学校に勤務しております。養護学校には、小学部・中学部・高等部・訪門部に分れており、小生は訪門部に籍を置いております。訪門部の生徒は、主に寝たきりで学校に通ってこれない子供です。そういった子供の家を毎日訪門して、授業をするわけです。教育の押し売りみたいなものです。中には優秀な生徒さんもありまして、卒業後（訪門部は中学課程まで）、通信制の高校に入った子供もおります。その子が、理科の選択科目に生物をとったというので、それでは小生が勉強を手伝ってあげる、ということで、その子の家へ行きました。ちょうど発生分野を習っているところで、教科書には例のカエルの卵の断面図がのってあります。しかし、悲しいかな、その子は卵はおろか、カエルもオタマジャクシすらも見たことがないのです。無理もありません、歩くことができないのですから。それでも一応、発生学をカジったつもりでいる小生は、何とか理解してもらおうと、図を見ながら説明します。しかし説明しようとすればするほど、あせればあせるほど、原口が、オルガナイザーが、シュペーマンが、フオークトが……。自分が何を言っているのかわかりません。今にして思えば、自分もたいして理解していなかったんだなあ、と思います。しかし、何と思いやりのある言葉でしょう、「先生の説明はよくわかる。」その子が言うのです。そうです、小生は、こういう生徒の思いやりに支えられながら、何とかクビにならずに動められているようなものです。当分の間は、養護学校にいるつもりです。会長の論文が生態学会誌に出たそうですが、ぜひ別刷なるものを1部下さいますようお願いいたします。生徒にオモシロイカエルの話をしてやれたら、と思います。

.....

<< 編集者への手紙 >> (その2)

お久しぶりです。

今回は、会費払いのついでに少し書かせてもらいます。

まずは、生物学会誌第10号“魚陸に上る(7)”のうちの「ウマイカ論争」の部分（といっても(7)の内容は全文これだけど）をそっくり、そのまま無断転載したことを、礼をかねて報告しておきます。というのは、僕の勤めている零細私立高校では毎年、対外的にカッコつけの為、研究集録なるものを作って宣伝にこれとめていたのですが、フラちなことに全教師に向けて、強制的に論文を要求するのです。何の因果で論文書かなあかんネン、冗談じゃない、といい

ながら、圧力にまけ、しゃあなしに書こうとしましたが、いかんせん、研究なんかしたことない。半年間もいっかげんに考えつけて出た答えが、全文引用というものだ。

“人殺し以外やったら何やってもいい”という気分の近頃、半ばやけクソ、残りは面白半分で、一言一句まちががなく引用させてもらいました。しかし、写すのもたいへん。原稿用紙に写しながら思ったんですが、読後の感想は、話に一貫性があるような気がしてたんやけど……、何じゃ、あの話のとっちらかりようは！

蛇足ですが、引用文であることを示すため、文の最初と最後に「」をつけて、注として、“以上の文は（なんと原稿用紙まるまる12枚）全文引用”とことわり書き付けたら、ことわり書きの文、校正の段階で、校長に知られたらおこられるとのことで、カットされた。ワッシャ、知らんゾー……。

話は変わりますが、最近の学会誌の内容では、流石三十美“教員採用試験考”が実感がこもっていておもしろかった。ホント。なお、あの文の最後に、現役教師からの教育に関する原稿募集とありましたが……。現役教師に対し“教育”について考えを示せとは……、自分の素性を明らかにせえ、というのと同じで、たいした考えもなく毎日をすごしている者としてはキツイ！（なぜかって？ 言ったらカッコわるいもん） どのようにかっこわるいかってーと……

簡単に言いますと、今、僕のいる私立高校はできて5年目で、ようやく生徒の質が上ってきた状態(?)で、教師も、3人の管理職(校長・副校長・教頭)以外は、すべて新卒に毛の生えた程度。教員数もぎりぎり、全員担任もち。ここで生じる問題は、すべて教師間のものばかり。上がないせいか、1年目からいたものが、卒業生を出したとたん、いっばしの教師づらするようになり(生徒に対しても、同僚の若い者に対しても)、管理職の方はサラリーマンに徹していて、そのくせ、プライドだけは高いとくる。こんな中で、僕はどこに位置するかって?部外者ですよ!部外者! 登校時はウォークマンを聞きながら自転車でギリギリに入り、勤務中は職員室でまたまたウォークマン聞きながら時間つぶし。放課後は、即、ラケットを持って外へ!(相手がいないうちは1人で壁に向かってテニス。)職員会議はねっばなし。こう書くと、かなり閉鎖的なようだが、ナカナカどうして。学校には生徒もいるし、アホな教師からがってると、ケッコーおもしろい。(こういう性格は大学時代に形成されたみたい。)生まれてから学校に行き出して、5才の時からだからもう27年がたとうとしている。最近の日曜なんか、テニスとローラースケートしに学校へ行く。そういえば、1ヶ月ほど前にローラースケートでころんで腰を打ったのがまだ痛い。近ごろは疲れが腰にくる。たまらんワァー!

話をもとすと、どんなアホでも27年間も同じことしてたら、要領わかるで。今年の夏休みには、修学旅行で北海道にも行ける。ルンルン、てなもんですわ。こんな状況から、“教育とは何か”なんて答え、出ると思う?

言いわすれましたが、この手紙はズル休みして書いています。(注、この学校では有給休暇は一切なく、1回でも月に休むと、皆勤賞と銘うって月給の一部<4500円>がひかれるシステムになっている。今月はすでに休んでしまったので、頭きて、今日ズル休みしたしだい。)

何かわからんこと書きましたが、最後に、生徒って担任がダメだとしっかりしてくるものですヨ。

5月28日(ズル休日) ポロ・アパートにて

ジャリンコ ㊟

乱筆乞許 ㊟ 禁無断転載 ㊟

<< 編集局 だ よ り >>

(その 1)

“拝 啓 日本生物学会誌19号はまだでていないのですか？ 18号が来てからずいぶんとたっているのに 送りわすれているのかと心配になったのです。まだ発行されていなければよいのですが 発行されていたら御送り下さい。 敬 具”

最近加入されたある若い会員からの手紙です。第18号は5月15日発行、すでに半年以上経過していますから、“慣れない”会員が心配されるのは、無理からぬところ。ですが、そのくらいでおどろいていたら、当会会員はつとまりません。最近だいたい年3回くらい出していますが、かつて1年に1冊しか出さなかったこともありましたが。発行間隔はひとえに、会員からの原稿の集まり具合に左右されます。会則の「会誌は原稿が集まり次第発行する。したがって、原稿が集まらなかつたら永久に発行しない」を実行しているわけです。だから、会誌をどんどん出してほしいと思われる方は、どんどん原稿を書いて送って下さい。400字づつ100枚で1号出ます。

もっとも、自分の書いた原稿ばかり出ている会誌など、読んでも面白くないでしょうけど。

(その 2)

グリコ事件の犯人が森永のお菓子に青酸ソーダを入れて、人々の退屈を粉らわしていたある昼下り、当然にも理学部の一部屋ではコーヒーの香りが漂っていた。

編集局長補佐「こんにちは、会長。お孫さんが出来たそうで、これで名実共におじいさんになりましたね。」

会 長「孫は娘が産んだので、わしが生んだわけやないから、わしの老化とは関係ない。といっても、会長たるものは、常々後継者のことは考えとかんならん。君なんかどうや、そろそろ補佐から会長への出世を考えてみたら。」

補佐「もうそんなこと考えてるんですか。ほくなんか会長なんか勤まりませんよ、とても。」

会長「別に君が有能やと言うてるわけやない。会長やれるようなヒマ人は君くらいしかおらん、君が最適任者ということや。」

補佐「そんなら会長はヒマだから会長をやってるんですか。」

会長「そういうわけではないが、ヒマつぶしにはちょうどええで。それに、“学会”の“会長”やってるとしたら、世間体もええしな。」

補佐「ほかの学会ならともかく、日本生物学会に限っては、あんまり世間体がええとは思えませんけど。それに、ほくを会長にしたら後悔すると思いますよ。」

会長「なんでや。」

補佐「会長というからには“独裁権”もひき継ぐんでしょう。そしたらまず手始めに、マイカー一乗ってる会員は除名することにします。会員の大部分は車持ってるでしょうから、ほとんど会員はいなくなります。日本生物学会は自然消滅、当然会長も要らなくなりますねえ。」

会長「そうかんたんにはいかんで。車くらい止めても、何も困らんからな。」

補佐「いま止めてもだめです。1年以上マイカーに乗った人には、会員資格がないことにするんです。」

会長「そんな会則はないで。」

補佐「独裁権で、いま作ることにしました。それに会長は、車文明を破壊するために車に乗って、石油をどんどん消費するんじゃないんですか。車止めたら石油なくなりませんよ。」

会長「そうやったな。大型免許も取ると書いたしな。」

補佐「会長の家の車庫は確か、軽自動車じゃないと入らなかったんじゃないですか。大型トラックに乗るようになったら会長は車庫に住んで、車を母屋に入れんならんですね。車社会を破壊するのも楽じゃないですね。」

会長「車庫で寝んのはかなわんな。孫ができたというのに。」

補佐「孫は関係ないですよ。“交通評論家”と自称するんだったらそのくらいしても当然でしょう。」

会長「評論家というのは、評論だけしてるから評論家なんや。実行したら評論家でなくなる。」

補佐「評論と言え、けとばすとバラバラになる車の事が書いてありましたね。でも、もっと簡単に確実な方法がありますよ。」

会長「また突な事考えたんやろ。」

補佐「まず車のマフラーにビニールチューブをつなぎます。それからその先を車内に入れるだけでいいです。」

会長「そんなことしたら中毒して死んでしまうやないか。バラバラ自動車の良い所は人を殺さんとこにあるんや。」

補佐「そやけど、会長、石油がなくなるまで待っていたら、会長の孫も大量の排ガスを吸い込んで、今はきれいなピンク色の肺も真っ黒になってしまいますよ。」

会長「孫はともかく、どんどん吸い込んで真っ黒になってほしい人もいるけどな。」

補佐「会長だって考えることは似たものやないですか。じっさい、車下人を殺しても、殺人はおろか、犯罪にもならないんですからねえ。グリコ事件の犯人はまだ1人も殺していない

のに、もう立派な犯罪者にされてますね、損してると思いませんか。“みんなで殺せば恐くない”。」

会長「君も相当な“過激派”やなあ。もっとも、いまごろそんなことに気がつくようでは、勉強が足らん証拠やけど。」

補佐「それじゃ、ほくも免許とって車に乗ることにしようかな。コーヒーごちそうさまでした。」

## 薬の安全性を私達の手で！

### 一大鵬薬品労組の闘いを支援しようー

単調なラッパの音をバックに、軍隊ラッパの口からオタマジャクシがこぼれてくる。そんなテレビのコマーシャルをごらんになったことがあると思います。「正露丸」の「大ホウ薬品」です。ところで、この「正露丸」という胃腸薬の昔の名前をご存知ですか？ 実は「征露丸」といったのです。明治のおわり、日本はロシアと戦争をやりました。大陸へ出征した兵士たちはおなかをこわし、そして「征露丸」すなわち露（ロシア）を征服する丸薬のお世話になったというわけです。ラッパは軍隊の象徴です。この名前が「正露丸」と改められたのは、戦後になってからでした。でもまだ軍隊ラッパは残っています。

今年（1984年）の6月26日付朝日新聞に、次のような記事が出ました。

大学にいて会社の批判をすることは容易ですが、会社の中から批判する、つまり「内部告発」なるものは、そう簡単にはできません。どこかに勤めている方ならすぐ理解できるでしょう。同労働組合員は、実はたった8名、会社のなかで孤立しつつ、それでもあらゆる圧力に抗して（などというと当人たちははずかしがりそうですが）、業の危険を訴えつつづけています。

およそ無責任で無節操な日本生物学会およびその会員としては、日頃の退屈な生活のせめでもの罪ほろぼしとして、彼らの活動を少々援助してはどうかと思います。それで、支援要請のピラと署名用紙を付録として本誌にはさみました。会員諸氏は熟読の上、内心ジクジたる人は¥2000払って支援会の会員に、それほどもない人はせめて署名くらいして、直接支援会の方へお送り下さい。

（日本生物学会 独裁会長 奥野良之助）

日本生物学会誌 第19号 1984年12月15日

編集・発行

日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者

奥野良之助

許可無断転載